詠む広場

毎日俳壇

井上康明 選

悴(かじか)み手を日時計に翳(かざ)しけり
小平市　中澤　清
〈評〉寒さにかじかんだ手を、日時計に降り注ぐ日にかざし、あたたまる。日時計は影を地に落とし、冷ややかに時を刻んでいる。

極楽の切符見せ合ふ日向(ひなた)ぼこ
広島市　村越　緑
〈評〉極楽の切符とは、病院の診察券か。冬の日なたに憩う老人たちが、極楽へ行こうと話し合う。

寒の水薬のごとく飲み干せり
東久留米市　矢作　輝

飛行雲伸ぶや冬木にひしめく芽
周南市　九内　千沙

白菜のあはき素朴を鍋に煮る
東京　野上　卓

松過ぎの乾ききつたる街の色
奈良市　伊東　勝

屋敷神冬日の扉開け放し
鎌ケ谷市　佐藤　紀子

陽(ひ)にならびふくら雀(すずめ)の胸真白
相模原市　小山　鞠子

石蕗(つわ)の花僧一人立つ無人駅
久留米市　持地　恒美

年賀状が鎹(かすがい)の友ひとり減る
西海市　まえだいっそう

片山由美子 選

古びたる衣桁(いこう)彩る春小袖
奈良　高尾山　昭
〈評〉春小袖は新年に着る晴れ着のこと。古びた衣こうのしばしの華やぎは、枯れ木に花が咲いたかのようなというべき趣である。

冬ぬくし日のよくあたる写真館
東京　渡邊　顯
〈評〉どこか懐かしさを感じさせる写真館という響き。昔ながらの町並みまで想像させる。

袋より十日戎(とおかえびす)の笹のぞく
岸和田市　西野　誠

日溜(ひだま)りの日の匂ひけり寒紅梅
岡山市　和田　大義

群雀(むらすずめ)屋根から屋根へ日脚伸ぶ
福岡　手島喜美江

風邪の子の熱いくたびも計りたり
岸和田市　妙中　正

何処(いずこ)より来しトラックか屋根の雪
沼津市　川井大次郎

人日(じんじつ)や少し伸びたる爪を切り
和歌山市　宮本　啓子

寒鯉(かんごい)も水も動かずなりにけり
さぬき市　景山　典子

滑空の羽ゆるやかに冬の鳶(とび)
広島市　谷口　一好

小川軽舟 選

欠けたるは何ひとつ無き枯野かな
山形　佐藤美和緒
〈評〉何もない枯れ野だ。欠けたものがないと言うのは逆説的だが、何ひとつ加えることを許さない完璧な枯れ野が現れる。

初売(はつうり)や米子に二つ百貨店
米子市　長田　遼平
〈評〉今どき百貨店が二つもある地方都市はめずらしい。福袋を並べて初売りにも力が入る。

寒梅や今夜南岸低気圧
横浜市　吉野　暢

消灯の病棟の黙(もだ)年移る
千葉市　木村　史子

小春日や古き句帳の若き母
真岡市　小川　充

風に鳴り風を鳴らして枯木山
北本市　萩原　行博

寒暁(かんぎょう)の廊下軋(きし)ませ長湯治(ながとうじ)
国分寺市　野々村澄夫

初日待ち天守に並ぶ雀(すずめ)かな
紀の川市　中島　盛紀

つなぐ手も離す手もなく大晦日(おおみそか)
名古屋市　外山　雪

数へ日の喫茶店にて妻と会ふ
東京　青野　暦

西村和子 選

蟹味噌(かにみそ)に合はぬ酒なし雪見宿
志木市　谷村　康志
〈評〉二重否定を用いて、どんな酒にも合う美味を強調した。しかも旅先の雪を眺めながら酌むぜいたくなひと時。酔いが伝わる句。

寒梅に段染めあはき茜空(あかねぞら)
立川市　大西　信子
〈評〉あかね空の微妙な色合いを、「段染め」と表現して成功した。日本語の豊かさを教えられる。

今朝やけに美しく飛ぶ寒鴉(かんがらす)
川越市　大野宥之介

豆撒(ま)きて鬼は遺影に一礼す
明石市　島谷喜代孝

余生にもなほ新天地日脚伸ぶ
四日市市　佐藤とみ子

さしむかひ毛糸巻く母ひとり占め
東京　鈴木　智子

沼涸(か)れて得体(えたい)の知れぬもの動く
和歌山　神野　一馬

花ミモザ弥撒(みさ)のオルガン厳かに
松山市　楠本　武

数の子や七人家族から二人
小田原市　林　梢

屋上のテノール長き猫の恋
倉敷市　行本　章允

調べの鼓動

梅の季節

星野高士

実はもう冬ではない。今年の立春は2月4日だった。なので、もう春だ。俳句をやらない方からすると、「なぜこんなに寒いのに」と思われるかもしれないが、暦の上では春になっている。

俳句は春夏秋冬の季題を入れて詠うことになっている。例えば「寒し」は冬の季題なので、今なら「春寒し」で詠う。あるいは「コート」は冬の季題なので、「春コート」で詠うといった具合だ。春なので暖かい季題ばかりと思いきや、春なのに寒い日を詠う季題もある。

さて「梅」や「梅見」は春の季題だ。だが、梅は花期が長いので、立春前にもちらほら咲き始める。そういった梅を詠う時は、「冬の梅」や「探梅」といった季題を使う。「探梅」は早くから咲いている梅がないか、散歩しながら探すという季題だ。春が近づいていることを感じられる、情緒のある季題だと思う。

句会のために、毎週のように各所の庭園や寺社に行っている。今年は1月なのにもう梅が満開のところもある。地球温暖化のせいだと思う。探すまでもなく、梅が咲いてしまっている。「冬の梅」で詠もうにも、満開の梅だと、どうも「冬の梅」らしくない。「冬の梅」という季題から想像される梅は、ちょっと咲いているような様子だ。

どんなに地球温暖化が進んだとしても、季題全てが消えることはないと思う。一方で、繊細な意味合いを持つ季題は、今後詠うのが厳しくなるだろう。その時は新しい季題を考えることになるかもしれない。

（ほしの・たかし＝俳人）